

文教大学における体育科教育の授業に関する研究

— 球技領域に対する実態調査から —

深 町 明 夫 ・ 中 林 忠 輔

How to Organize a Class of “The Physical Education Teaching”

— A Research in Bunkyo U. with Special Reference to Ball Games —

Akio Fukamachi · Tadao Nakabayashi

I はじめに

よい体育の授業とは高田典衛氏が述べているように、1. せいっぱい運動させてくれた授業、2. ワザや力を伸ばしてくれた授業、3. 友人と仲よく学習させてくれた授業、4. 何かを新しく発見させてくれた授業であろう。このような児童にとって望まれる授業を実際に行うには経験が大きな役割を果たしている。しかし経験だけではこのような授業が出来るとは思われず、そこには授業を遂行する上での原理、原則がある。将来、教員を目指す学生は実際に指導する機会には余り恵まれないが、大学の授業などを通し論理とそれをふまえた経験豊富な教員の考え方等を早期に吸収することは大切と思われる。

本学教育学部初等教育課程の体育科教育においてもその意義のもとによりよい授業を行ない、学生が望ましい指導者として育つことを期待するものである。3年次に履修する体育科教育Ⅰ-2は、定められた担当の学生が他の学生を指導する授業形態で行なわれており、教員は指導担当者の事前指導（指導案の点検等）や授業時のアドバイザーとして係わる。そして学生は年間で器械運動、陸上運動、

ボール運動、表現運動の四領域を演習履修する。従って各領域を学習する授業時数は5～6時間となる。

ボール運動においては、授業前に「ボール運動に何を期待するか」、授業後に「ボール運動を終えて」、指導担当者には「指導を終えて」のレポート提出を義務づけている。

本研究はレポートの記述内容を分析することにより、授業による教材に対する意識の変容や一般的球技指導上の留意点と学生指導者が関心を示す留意点との相違などを検討するものである。球技は基礎技能、応用技能、ゲーム、また個人技能、チームプレーなど様々な形態を含んでいるので、望ましい授業の進め方については模索・研究の余地が多く、今回は学生の実態を把握することにより今後の指導の基礎資料とするものである。

II 研究の方法

1. 授業前後のレポート記述内容の分類・折法について

ボール運動においては、授業開始に先だち「ボール運動に何を期待するか」、授業終了時に「ボール運動を終えて」の題目によるレポートを課している。レポートは400字詰め原

稿用紙1枚とし、原則として題目、専修、学籍番号、氏名をその中に記すので、記述は実質360字程度となる。それは受講にあたり、目的意識や心構え等を明確にさせ、さらに終了時には自己の期待した事柄との照合によって、今後の課題や反省、授業に対する意見等を提起させるのに有意義であると考えられる。本研究はこのレポートの記述内容を分類・分析することにより、学生の意識、態度変容を知り、今後の指導に役立てようとするもので分析方法は以下の様である。

レポートに述べられている内容を使用語句を中心に、A群—教材の特性に関する事項、B群—指導に関する事項、C群—技能に関する事項、D群—チームに関する事項、E群—ルールや知識に関する事項、F群—態度や安全に関する事項、G群—体力や健康に関する事項、H群—その他の事項の8群に分類する。各群は相互に関連しあうものであるが、文章表現や語句の用い方から分類を行い、難解のものは研究者両者の合意判断によった。なお各群の具体的用語及び事項は次のようである。A群—他教科や領域との関連、ボールの特性、集団技能(チーム)重視、楽しい・好まれる・親しまれる運動遊び・ゲーム的要素が強い、レクリエーション・生涯スポーツとして有効など、B群—準備・整理運動、説明、示範、教材の配列、運動量(練習回数)、指導者の運動参加、慣れさせる指導、未熟者(低技能者)への配慮、楽しさ・楽しい指導、指導の難・易、より良い(効果的)指導法、指導者の資質、指導法に関する一般的事項など、C群—ボール(用具)の扱い方、個人・基礎技能、集団・応用技能、基礎と応用との関連、ゲームの進め方、自己技能の優・劣、教師に必要な技能、苦手な種目など、D群—集団行動、チーム編成、チームワーク、チームプレー、リーダーシップ、チームでの役割など、E群—ルール・規則の重要性、ルールの熟知度、ボール運動についての知識、審判の仕方

など、F群—勝敗に対する態度、社会性・社会的態度、協調性・協力的態度、ゲーム中のマナー・態度、スポーツマンシップ、ルール・規則を守る態度、人間性・精神的影響、安全に対する配慮、怪我の防止など、G群—体力を養う、健康を高める、自己の体力評価、運動の心身に与える価値など、H群—コート、用具、発育と教材、評価、個人差、性差など。

次に、「ボール運動に何を期待するか」と「ボール運動を終えて」のレポート別に各専修に分け、具体的事項の記述数(度数)を求めてから各群の集計をした。これを専修別に人数に対する百分率及び全度数に対する百分率を算出した。一群の中でも数用語を用いて記述している場合があるので人数に対する百分率は100%を越えるものが出た。本来比較研究法としては分布の仕方や集団間の差の有意性等を基にして、検討論述すべきであるが、本研究はボール運動のみを対象とした実態把握が主眼であるので、度数及び百分率による検証にとどまった。なお調査対象は53年度生としたが、レポートの記述量が400字を越えるものは除外した。

2. 指導上の留意点について

学生は図-1に示された内容に沿って、指導の割り当てが決定され、指導案の作成に入る。指導案の作成、展開に際しては図-2の様な内容が示されており、また指導上の留意点として、ボール運動の特性(ボールを用いて行なわれる、チームゲーム、個人技能、

図1 授業の進め方

週	種 目	A $\frac{5}{分}$ 準備運動 +20分	B 20分	C 20分
1	ド ッ ジ	ボール投げ遊び①	ボール投げ遊び②	ドッジボール
2	ポ ー ト	パス・ドリブル	2 men パス 3対2	ゲーム
3	バスケット	パス シュート ドリブル	3対2 2対2	ゲーム
4	ラインサッカー ソフト	ボールけり 遊び	ライン サッカー	トスバツ ティング ゲーム (ソフト)
5	サッカー	キック トラップ	ドリブル シュート	ランニン グパス 3対1 ゲーム

図2 指導案の作成 展開の様式

本時のねらい 3人の担当者共通の
ねらい
各担当者のねらい

段階	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点	備考
導入 展開 整理		運動技能 やルール などの具 体的内容 (項目)	運動方法 の図示と 解説	技能の要点 社会的態度、健 康安全への配慮 指導の留意点	運動場の 使用法 隊形の変 化用具・評 価

集団技能を重視，調整力の向上，集団としての協力，勝敗に対する態度）指導上の問題点（基礎的技能をゲームに結びつけるにはどのようにしたらよいか．チームの編成はどのようにすればよいか．協力，責任，公正など社会的態度を育てるにはどうしたらよいか．狭い運動場における効果的指導はどのようにしたらよいか．基本→動き→対敵→スコアリング→ゲームの流れをどう授業に生かすか）が提示されている．指導案は前述された内容をふまえ，一案提出，ミーティング，修正案提出の過程を経て授業に入る．授業終了後には「指導をしてみて」というレポートの提出を終えて，教材研究授業が終了する．学生が指導案作成，実践授業の過程において考慮しなければならないことは数多くあるが，指導案の作成過程で遭遇するものに限定して考えてみる．

表 1

番号	用 語
1	指導案 下準備
2	説明 ①内容 ②声 ③時機 ④隊形 ⑤図表 ⑥示範
3	技術指導 ①内容 ②教材の配列 ③時間の配分 ④練習回数・運動量 ⑤対応力 ⑥技術差・男女差 個人差 ⑦練習隊形・班編成 ⑧笛の使用
4	ゲーム指導 ①チーム編成 ②チーム人数 ③ルール ④審判
5	社会的態度 ①協力・意欲・態度 ②チームワーク ③役割分担
6	安全
7	施設・用具 ①施設・コート ②用具 ③環境
8	体力・健康・発育・発達との関連
9	指導者の資質 ①体力・運動能力 ②知識

考察は前述された「指導を終えて」のレポートに表されていた用語を表1に示した要素に分類して，学生が授業の展開に際し，どのような要素に着目しているかを数量的に処理し，学生の指導に対して留意している点を把握するとともに，男子と女子の比較，㊦群（準備運動，個人技術），㊧群（対人技術），㊨群（ゲーム）に分類して，それぞれの分野における留意点の差を吟味する．なお微妙にどの要素に入るかについては前項同様研究者の合意によった．

Ⅲ 結果と考察

1. 授業によるボール運動教材に対する意識の変容について

授業前に提出された「ボール運動に何を期待するか」に述べられている事項の群別，専修別記述数（度数）及び人数に対する百分率，全度数に対する百分率などは表2の通りである．

記述されている用語句や事項の総数を人数で除したもの（f/N）を表2の下欄に掲げたが，平均4.8項目について述べていることになる．各専修とも5項目前後に分布しており，記述数については大差がないものと考えられる．

次に群別の記述数からの結果を見ると，F群—態度・安全 A群—教材の特性 B群—指導 D群—チーム C群—技能 E群—ルール・知識，G群—健康・体力，H群—その他の順に記述数が多く，各群内の具体的事項で50名以上の多くが述べているものは次の通りである．（注）記述数を（ ）で示した．

F群 協力・協調性（187），社会性（78）勝敗に対する態度（60），安全や怪我の防止（52），A群 楽しさ（204）遊び・ゲーム（67），集団で行なわれる（53），B群 楽しい指導（141），効果的指導（75），指導法一般（66），D群 チームワーク（チームプレー）（232），集団行動（57），C群 基礎・個人技能（172），

表 2

群	専修 (N)人数	国語		社会		数学		理科		音楽		美術		体育		家庭		特殊教育		計	順位	
		128	93	97	27	43	24	47	37	14	510											
A	教材の特性	110	86 19	84 19	90 19	77 18	79 17	25 17	93 17	112 23	48	100 19	24 19	32 14	68 14	26 15	70 15	10	71 14	436	85 18	2
B	指導	99	77 17	68 15	73 15	95 22	98 22	17	63 12	72 15	31	19	72 15	79 15	96 19	29	16	14	78 19	417	82 17	3
C	技能	96	75 16	65 12	70 15	40 9	41 9	24	89 17	70 14	30	14	58 11	33 11	70 11	20	54 11	12	86 10	334	65 14	5
D	チーム	94	73 16	55 12	59 12	65 15	67 15	24	89 17	65 13	28	18	75 14	26	55 11	26	70 15	7	50 10	343	67 14	4
E	ルール・知識	66	52 11	47 11	51 12	50 7	52 10	15	56 10	19 9	44	12	50 10	14	30 6	14	38 8	9	64 12	246	48 10	6
F	態度・安全	93	73 16	97 22	104 22	72 17	104 17	28	104 20	43	100 21	31	129 25	63	134 27	47	127 27	19	136 26	493	97 20	1
G	健康・体力	21	16 4	19 4	20 4	20 5	21 5	9	33 6	19 4	8	6	25 5	18	28 8	11	30 6	2	14 3	114	22 5	7
H	その他	14	11 2	7	8 2	13 3	13 3	1	4 1	5 1	2	1	4 1	3	6 1	4	11 2	0	0	45	9 2	8
度数合計 (f)			593	442	432	143	143		209	125	234	177	73	2,428								
f/N			4.6	4.7	4.5	5.3	5.3		4.9	5.2	5.0	4.8	5.2	4.8								

(注) ① 記述数(度数) ② 度数の人数に対する百分率
③ 度数の度数合計に対する百分率

①	②
	③

応用・集団技能 (59) E群 ルールの重要性 (159), ルールの熟知度 (52), G群 体力を養う (72).

各専修による顕著な差は認め難いが, 8割以上の学生が述べている事項に注目すると, F群は社会, 理科, 音楽, 美術, 体育, 家庭, 特殊教育, A群は国語, 社会, 理科, 音楽, 美術, B群は数学, 体育, 特殊, C群は理科, 特殊, D群は理科である。

従って授業前の教材の受け止め方や授業に期待する姿勢としては, 小学校指導書体育編に述べられているところの「体育における運動のもつ意味は単に体力づくりや人間形成の手段としてだけにとどまらず, 運動を身につけること自体も同時に重視することがこれからの社会に生きる児童を考える場合に必要だからである。現在から将来の生活にわたって運動に親しむことができるようにするためには, 運動の技能や運動をめぐって必要な態度, 行動の仕方だけでなく, 何よりも運動の楽しさ・喜びを理解させることが重要である」を受けて, それとボール運動の特性とを照合して述べていると思われ, ごく一般的常識的な内容と判断できよう。すなわちボール運動の特性を述べると共に, その中でも重視しなければならない点として, 勝敗に対する態度や

社会性, 安全への配慮, 個人や集団技能の生かし方, ルールを知りそれを守ってチームとして協力できることなどをあげ, それらをふまえて楽しく指導するためにはどのようにすればよいかをつかむことを期待していると考えられる。

授業が終了してから提出されたレポートに述べられている事項の群別, 専修別記述数(度数)及び人数に対する百分率, 全度数に対する百分率などは表-3の通りである。

記述度数の人数比は平均4.5でやや減少しており, その傾向は各専修間にも認められる。

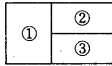
次に群別の記述数からの結果をみると, B群—指導 C群—技能, F群—態度・安全, E群—ルール・知識 D群—チーム, A群—教材の特性, G群—体力・健康 H群—その他の順に記述度数が多く, 各群内の具体的事項で50名以上の多くが述べているものは次の通りである。(注)記述数を()で示した。

B群 楽しい指導 (128), 効果的指導法 (100), 指導法一般 (66), 指導は難しい (65) 示範など (63), 説明法 (56), C群 基礎・個人技能が劣る, 教師に必要な技能 (74), 自己技能が劣る (64), F群 協力・協調性 (155), 安全への配慮・怪我の防止 (79), 社会性 (63), 勝敗に対する態度 (51), 規則を守る態度 (50),

表 3

群	専修 人数 (N)	国語		社会		数		学		理		科		音		楽		美		術		体		育		家		庭		特殊教育		計	順位
		130	124	132	36	40	25	59	38	18	602																						
A	教材の特性	75	58 13	52 10	42 10	38 7	29 21	11 13	58 20	50 10	19 14	76 24	41 9	19 11	50 11	13 17	72 17	281	47 11	6													
B	指導	143	110 25	128 25	103 24	147 27	111 44	122 27	53 27	133 27	37 28	148 28	90 33	153 33	36 21	95 21	117 28	699	116 26	1													
C	技能	120	92 21	85 16	69 16	90 17	68 17	28 17	78 35	88 18	14 10	56 28	43 16	73 16	25 19	66 15	11 14	61 45	75 17	2													
D	チーム	60	46 10	65 12	52 12	71 13	54 20	13 12	56 15	38 8	10 7	40 7	28 10	47 9	16 9	42 9	33 8	291	48 11	5													
E	ルール・知識	74	57 13	58 11	47 11	60 11	45 14	14 8	39 29	73 15	13 10	52 10	32 12	54 15	26 15	68 21	16 21	89 44	53 12	4													
F	態度・安全	57	44 10	122 23	98 23	74 18	28 17	78 17	27 14	68 27	108 20	43 20	73 16	32 19	84 29	6 8	33 19	440	16 9	3													
G	健康・体力	35	27 6	14 3	11 3	24 4	18 4	7 4	19 11	28 6	10 7	40 7	1 0	29 6	11 6	6 1	114	4 4	7														
H	その他	17	13 3	14 3	11 3	16 3	12 4	2 1	11 4	10 2	4 4	16 3	12 4	20 6	16 4	2 3	11 3	57	9 2	8													
度数合計 (f)		581	538	544	166	194	134	273	171	76	2,677	—																					
f/N		4.5	4.3	4.1	4.6	4.9	5.4	4.6	4.5	4.2	4.5	—																					

(注) ① 記述数(度数) ② 度数の人数に対する百分率
③ 度数の度数合計に対する百分率



E群 ルールの重要性(124), ルールの熟知度(108), 知識の必要性(53), D群 チームワーク(171), A群 楽しさ(200)

専修別に見るとB群は全専修の95%以上の学生が記述している他, F群を社会と美術, C群を国語が多く述べている。(9割以上). 社会専修が社会的態度や協調性を強調している点は注目に値する.

授業後では, 実技・演習の体験によって, やや抽象的であった体育観や教材観が具体化されると共に, 将来教師として指導する場合を意識・自覚してか, 記述内容が指導との関連性が強くなっている. 指導に関しては, 前述した事項の他に教材の配列や授業の流れ, 指導者の資質, 運動量や練習回数等をかなりの者があげよりよい指導をするために着眼点も定ってきたようである. 技能面では, 基本的技能の重要性を認め, 自己の能力を伸ばし教師として児童と共にゲームが出来るように望んでいる. また種目としてはサッカーを苦手とするものが女子に多く, 今後の課題となった. 態度, 安全面では社会生活に必要な種々の規範を学ばせる格好の教材であるとしそれをどう育て指導で生かすかを知りたいと述べる者が多い. これはチームワークや個人を集団の中でどう育てるかとの意味あいからD

群(チーム)からの論述でも多かった. ルールや知識面では, ボール運動でルールは重要と認めながらも熟知度が低く, さらにボール運動の知識の乏しさと審判の仕方に対する不安等も述べている. 教材として楽しい, 親しみがもたれる等をあげる者が多かったが, 児童の立場や過去の経験からではなく, 授業を通して体験し実感として述べている点が, 内容的に授業前と異なる. その他, 怪我防止のための準備運動の必要性, 体力を養い運動の価値を認める, 個人差・性差をどう扱うか, 評価について等の指摘もあり, 問題点も明確になってきているようである.

以上, レポート分析から授業前後の意識について述べてきたが, 抽象的から具体的に, 学生の見方から指導者の発想へ, 受動から能動へと向上変容する過程を授業で正確にとらえ, 学生の希望を生かしつつ展開していかねばならないと考える. (深町 明夫)

2. 指導者としての教材意識について

(1) 指導案との関連

指導案が学生にとって机上のものであるとはいえ, 指導案は教材全体の流れを把握する上でも緻密であることが要求され, その指導案は誰が見て授業しても同じ様な指導がなさ

表4 レポートに表われた指導上留意した用語の頻度

項目	1	2	3①⑥	3-⑦	3-⑧	4①②	4-③	4-④	5	6	7	7-③	8	9
頻数	50	109	92	11	6	7	30	10	24	7	25	13	7	35
%	37.0	80.7	68.1	8.1	4.4	5.2	22.2	7.4	17.8	5.2	18.5	9.6	5.2	25.9
順位	3	1	2	9	14	11	5	10	11	11	6	8	11	4

総数 135名

表5 男子と女子の比較

項目	1	2	3①⑥	3-⑦	3-⑧	4①②	4-③	4-④	5	6	7	7-③	8	9
男子	32.6	89.1	80.4	8.4	2.2	8.7	19.6	6.5	17.4	6.5	15.2	10.9	6.5	8.7
女子	39.3	76.4	61.8	7.9	5.6	3.4	23.6	7.9	18.0	4.5	20.2	9.0	4.5	34.8
△	△		*		△・	*	△	△	△		△			△
順位	男 3	1	2	10	14	8	4	11	5	11	6	7	11	8
位	女 3	1	2	9	11	14	5	9	7	12	6	8	12	4

男子 46名 女子 89名 男女共 (%)

△ 女子の意識が高い項目

* χ^2 検定 ***0.01 **0.05 *0.1 •0.2

表6 ア群、イ群、ウ群の比較

項目	1	2	3①⑥	3-⑦	3-⑧	4①②	4-③	4-④	5	6	7	7-③	8	9
ア %	24.4	77.8	77.8	8.9	4.4	4.4	4.4	2.2	11.1	2.2	22.2	6.7	6.7	20.0
イ %	51.1	80.0	64.4	15.6	0	0	15.6	0	11.1	4.4	13.3	11.1	4.4	37.8
ウ %	35.6	84.4	62.2	0	8.9	11.1	46.7	20.0	31.1	8.9	33.3	11.1	4.4	20.0
順位	ア 3	1	1	7	10	10	10	13	6	13	4	8	8	5
	イ 3	1	2	5	12	12	5	12	8	10	7	8	10	4
位	ウ 4	1	2	14	11	9	3	7	6	11	5	9	13	7

ア群 男子 14名 女子 45名
イ群 男子 11名 女子 34名
ウ群 男子 21名 女子 24名

れるといった前提で立案されたものだけに指導案に書かれたことへの遵守は必要条件になる。指導案とか授業へ入る前の下準備は全体の37.0%の者が留意しており、今回の調査では3番目に位置している。その内容は指導案は書いたが、机上と現実が違うという主旨が大半で、指導立案の時機にもっと教材研究が必要であるとの意見が見られた。男子と女子との比較においては差は見られず、ア、イ、ウ群との比較ではイ群の半数がこの要素に着目している。このことは対人技能、応用技能として工夫されたパターンのドリルを指導する教材内容が影響していると思われる。

(2) 説明

実際に指導する教材の内容を事前に児童へ示すことは大切なことであり、特に身体活動を伴った教材においては教材内容の説明だけ

でなく、練習の方法、ゲームのルール説明など多岐に渡っている。留意する事項としては、児童にわかりやすい内容で説明できるか、大きな声ではっきりと意志の伝達ができるか、その説明の時期が適切であるかどうか、説明する時の児童の隊形はどうか、補助教材、図、表などを使用して行なうのがよいかなどが考えられる。運動の方法を言葉だけの説明で児童に対し十分な理解を得ることは困難な事が多く、特にパス、ドリブルなどの個人的技術に関しては示範が大切になってくる。部活動等で日頃運動に親しんでいる者はともかく、そうでない者は示範の重要性は認識しているものの実際には実施に踏み切れないでいることが多く、示範できる技能を身につけるか、また児童を使つての示範をどうしたらよいか留意される点である。また対敵技術にして

もドリブル1対1のように相手によって練習状態が左右されるもの、3対2や2対2など各自の役割をはっきり認識させるための練習方法上の示範も考慮しなければならない。今回の調査においては80.7%の者がこの項目を考慮しており、特に説明する順序とか内容、声の大きさ、言葉使いにおいてが多く見られた。男子と女子の比較においては各要素とも差はあまり見られない。またア、イ、ウ群間の差もあまり見られなかった。説明に対する関心の高さは予想以上であり、初めて人前で指導するといった心理的な面が多分に影響しており、初めての経験ということで学生に顕著な印象があったものと考えられる。

(3) 技術指導法

技術指導に際しては教材の配列、時間の配分、練習回数、運動量が児童の技能向上に影響している。教材の配列に関しては基礎技術、応用技術、ゲームの過程において基礎と応用との関連、応用からゲームへの発展の理解度が留意すべき点になる。また指導者は体育が得意で好きな者だけを対象にして行なわれるという訳でないので下手な児童、遅れた児童をどうするか、また男女差はどうするかといった配慮も大切になる。指導には一斉指導、班別指導、個別指導等があるが、球技においては使用する施設・用具等の関連から班別指導をとる例が多く、一斉に同じことを各班が行なうということで班編成にも留意しなければならない。また練習の開始から終了時までの指示の仕方も留意しなければならない。笛の使用法も問題として提起される。今回の調査においては61.8%と高い関心を示しており、その中で時間配分、パスの仕方等の技術内容に関するものが多く見られる。また少ないながらもその場面に適した方法を採用するといった対応力に関しても見られる。男子と女子との比較では男子80.4%、女子61.8%と差が見られ、男子の方が技術指導に関心が高いことを示している。笛の使用法に関しては全体

としては少ないながらも女子の方が着目している。ア、イ、ウ群間での比較では班編成においてイ群に関心の高さが見られている。このことは主に対人技術、チームプレイを行ったグループであることと関係があると考えられる。

(4) ゲーム

球技指導はその特性からゲームをうまくとり入れることと言える。ゲーム指導に際して留意すべきことはチームの編成、チームの人数、チーム内の役割分担の確認が大切である。またゲームをスムーズに行なう要素としてルール等のそのゲームに対する理解度、知識が必要である。そのゲームの仕組みを熟知することはその種目の特徴をうまく引き出せるしゲームに対する認識もかなり高揚できる。特に留意しなければならない点は審判法の習得である。審判がうまくできるかできないかによってゲームの様相はかなり変化してくる。バスケットボールのゲームのようにコート内へ敵、味方が入り混って行なう種目はファウルを取れる取れないはそのゲームの成否を決定する位の重要性を持っている。バスケットボールのゲームに限らずどんな種目のゲームにせよボールの所有がどちらかのチームへ行くかは児童達にとっては大切な事柄であるといえる。今回の調査ではルールに関することが22.2%とゲーム指導はルールを知っていること、少ないながらも審判への関心があることからルールを実践場面へ適応させる必要があると思われる。男子と女子の比較ではルール、審判に女子の方が、チーム編成、チームの人数に男子の方が関心が高かった。群別ではゲーム担当の学生に関心が高いのは当然としてもイ群にもルールへの関心があり、チームプレイを主体とした応用技術の練習にもルールが必要であることをうかがわせている。

(5) 社会的態度

球技における社会的態度の育成はチームゲームゆえに生じる児童自身の役割の遂行、ゲ

ームの開始、終了時におけるあいさつ、勝敗に対する態度、ルールを守ってのプレイなど数多くの場面があり、それらの場面を利用したチームワーク、リーダーシップ等の育成が留意事項になる。今回の調査では17.8%と球技の特性から考えても関心はあまりない。この事項は社会的態度に関する指導が時間をかけて行なわれることや、内容自体が抽象的で具体的にどのようなことをすればよいかといった着眼点が見い出せないからだと思われる。ア、イ、ウ群の比較において33.3%とウ群のゲーム指導者に関心の高さが見られた。

(6) 安全

指導時は事故の危険に遭遇しなければならない。怪我や病気、ときには死亡の危険さえも予想しながら対処しなければならない。指導はこのような事故を未然に防止する適確さを持たなければならない。今回の調査では安全面に関しての関心は低い様である。これは、安全指導が指導の際の必須条件として考えているからと好意的に解釈できるが、実際の指導に立ち合った立場でいえばゲームの際、夢中になっての衝突や予想以上の速いパスを受けそくなっての突き指、身体接触の際の捻挫など事故が起った時のみに気がつくのが大半であると思えるので、指導の際には安全面での留意は欠かせない要素と言える。

(7) 施設、用具

コートについては場所の安全の確認、児童の発育状態、技術、人数、広さ、ルールとの関連での適合性、用具に関してもボールの種類とか数の適切さなどを留意する必要がある。また施設、用具については事前の準備、管理が大切で、日頃からの確認が大切である。今回の調査では18.5%とやや関心を示していた要素である。男子と女子の比較では女子の方が関心を示し、ウ群のゲーム指導担当者に関心の高さが他の群よりも見られた。これはゲーム指導時におけるコートの大さの決定が、サッカーの様にあまりゲームの様相がわ

からないまま指導するようになり、コート作りをどのようにしたらよいかなどのその種目の知識不足とか、事前準備でどの位コート作りに時間がかかるかといったとまどいが影響していると考えられる。

(8) 健康と体力

児童の健康状態を知り、児童の体力を考慮することは指導にとって大切な事項であるが今回の調査ではその関心は少なかった。球技指導ということで、体力向上にはあまり目を向けていなかったと考えられる。

(9) 指導者の体力、運動能力、技術、知識

今回の調査では指導者本人の体力、運動能力、技術、知識に関心をよせる者が25.9%いた。女子においては34.8%と男子と比較して4倍も見られた。群別では対人、応用技術担当者に多く見られた。特に知識面はルールのみでなく運動の方法、技術指導にもわたっている。そして女子において技術面に関心が高いことは、指導に必要な技術を小学校の水準以上に習得したいという願望を意味していると考えられる。

Ⅳ ま と め

授業前に提出された「ボール運動に何を期待するか」に述べられている事項は小学校指導書体育編に述べられている目標、内容を受けて、ボール運動の特性とを照合した、ごく一般的常識的な内容で、「勝敗に対する態度や社会性」、「安全への配慮」、「個人や集団技能の生かし方」、「ルール」、「チームの協力」などが顕著に見られ、それらをふまえて楽しく指導するためにはどうしたらよいかを期待している。

授業後では実技・演習の体験によってやや抽象的であった体育の教材観が具体化された。将来教師として指導する場面を想定しての記述が多く見られ、内容としては「指導との関連」についてが多くなっており、児童の立場や過去の経験からだけでなく、授業を通して

体験し実感として述べている点が内容的に授業前と異っている。

指導上の留意点となる要素を抽出して、学生の教材研究授業終了時に提出されたレポート「指導を終えて」に見られる用語句を統計的に処理して、将来小学校の教員を目指す学生の段階での指導上の留意点を検討した結果、関心の高い指導上の留意点としては、「説明指導法」、「技術指導法」、「指導案との関連」、「学生自身の技能・知識面での資質」、「ルール」があげられる。男子と女子の比較においては「技術指導法」において男子、「学生自身の資質」においては女子に関心の高さが見られた。また指導種目別にみると個人技術担当者は技術指導法の「時間配分」に対人・応用技術担当者は、「指導案立案と実践とのくい違い」、「自己の資質について」、ゲーム指導者においては、「ルールの理解」などに高い関心を示していた。運動指導の必須条件である「安全面」、球技の特性である「社会的態度面」に関心を示す者が少なかったのは意外であるが、今後、これらの面にも関心を示させる授業を考える必要が明らかになった。

以上、レポート分析から指導前後、指導を終えての意識について述べてきたが、抽象的から具体的に学生の見方から指導者の発想へ受動から能動へと変容する過程を授業で正確にとらえていると思われ、指導した学生においては授業技術に着目している。このように学生の意識は授業体験でもかなりの変容が見られるが、実践指導に当たった学生の意識はさらに高まってきておりこの様な形態の授業の重要性を再認識できた。

今回の調査は全受講生及び指導担当者に果したレポートに表わされていた用語句を中心に抽出した方法をとったが、微妙にどの要素に組み入れたらよいかといった解釈に困る表現もあつたりして方法論的により客観性が必要であると痛感させられた。今後はアンケート方式を採用するなどしてさらに詳細な指導

上の留意点を探り、今後の授業の基礎資料としたい。
(中林 忠輔)

参 考 文 献

1. 文部省：小学校指導書 体育編 1978
2. 水野忠文他：体育教育の原理 東京大学出版会 1976
3. 前川峯雄他：体育科教育法 杏林書院 1975
4. 関 四郎他：体育授業シリーズ 球技指導ハンドブック 大修館 1974
5. 東京都教育庁体育部：体育指導上の諸問題 1968
6. 高田典衛：体育授業研究 明治図書1980
7. 黒木一美：小学校のボール運動 泰流社 1976
8. 中林久二：小学校体育指導の研究とその実践 葵書房 1973